

水彩 Technique。

メディウム！



新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店で。

<ホルベイン水彩用メディウムシリーズ>オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVクロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

川村克彦

鷹見明彦 文

森田華次 写真*印)

脳のジャンクル光の精霊



1988年、東京・銀座、コバヤシ画廊の個展会場で。サンプリングした画像を引き伸ばしたプリントの上にアクリルやメディウムで描く作品を多く制作した。背景の作品は、『Video Age Fantasia』(次ページ上)。この作品には、アンドレイ・タルコフスキーの『ノスタルジア』の一部が使われている



無題 1985
木に石膏、
アクリル絵具

1985

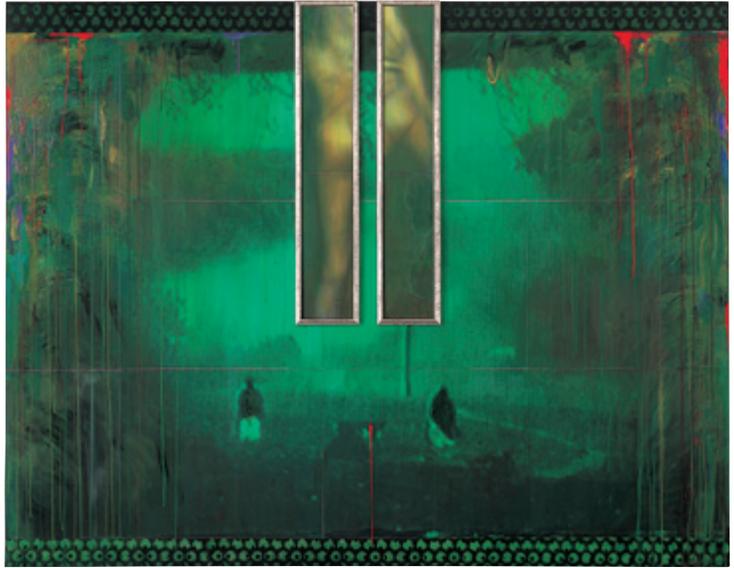
「日本画の学生のころから、^{にかわ}膠の代わりにアクリルで描いたり、顔料をシルクスクリーンで刷ったりしていました」

高校で美術部に入って、油彩や石膏デッサンを描き出した。パルビゾン派の絵が好きで、緻密な描写で風景や石などを描いたが、まわ

り、むかしから細かい作業が好きでした」。

和紙の里とオオムラサキの生息地としても知られる埼玉県の小川町。近年、都内からこの地に転居した画家は、山間に残る旧いカレイ粉工場跡を作家仲間と借りて、アトリ工兼展示スペースに改装中だつた。生まれ育つたのは長野で、軽井沢に近い御代田と佐久で少年時代を過ごした。天文学者が生物学者になりたいたいと思っていました。鉱物や化石の結晶を集めたり、植物の細胞などを顕微鏡で観るのが好きでした。理科の教師だった父の影響もあつたと思います」。

Video Age Fantasia 1988
ゼラチン・シルバー・プリントにアクリル絵具、メディウム、木、パネル
154×200cm 個人蔵
撮影=末正真礼生



1988 「ニュー・サイエンスや」・G・バラードなどの影響を受けて、共時性とかサイバー・パンクな世界観を表現しようと思いました」

りの「油絵」からは浮いていた。夢中でコロコロの絵を模写していたある日、忘れられない光の体験をした。「気がつくくと、画面も部屋も真っ赤になっていて。火事かと思って、あわてて外に飛び出すと、浅間山の麓にひろがる高原の風景が、東から西まで夕映えて完全に真っ赤でした」。

教育実習にきた日本画家の先輩に「日本画なら芸大に入れる」と言われて、日本画科をめざした。「日本画よりも、鉱物質の顔料に惹かれたのですが」。

東京の美術予備校で2浪して、1978年東京芸大の日本画科に入学。試験は、鉛筆での石膏デッサンと水彩の静物モチーフだった。25名の同級生には、千住博、前後には、河嶋淳司や岡村桂三郎など型破りの作品をつくっていく者たちもいた。

「予備校についで、菊などを写生させる大学の授業が退屈で、友人と銀座のギャラリー巡りをはじめ、現代美術の作品を知るように



波打ち際に触れて
1996
デジタル・コピー、
フレーム
制作協力=富士ゼ
ロックス
撮影=末正真礼生

なりました」。

「加納光於のタブローに魅せられて、瀧口修造の周辺、中西夏之や野中ユリの作品などに関心を持ちました。膠にかの代わりにアクリルで描いたり、顔料をシルクスクリンで刷ったりしました」。

《無題》(1985)は、銀座のギャラリーでの初個展の出品作。「美術予備校で講師をやりながら、彫刻的



世界のカタチ(OUTSIDE
INSIDE)Ⅱ 2005
キャンバスにアクリル絵具、
メディウム、布、木、照明器具
218×324cm
撮影=末正真礼生

2005 「まだ誰も足を踏み入れていない、 脳の中に広がるジャングルを描きたかった」

な要素のあるインスタレーションをつくるようになりました。

80年代のバブル期、「ポスト・モダン」とよばれた時代様式の派手なインスタレーションや、映像を使った作品が氾濫した時代だった。

《Video Age Fantasia》(1999)は、ビデオ映像を撮影したモノクローム写真の上に、アクリル絵具やメディウムで着色し描いたパネルを層状に重ね構成したシリーズの1作。「自分の身体を長時間露光で撮影した写真や古典絵画の部分、動物、顕微鏡、衛星写真、タルコフスキー、デレク・ジャーマンの映画のビデオなどからサンプリングしました。」

「コー・サイエンスやライアルワトソン、J・G・バラードのSFのビジョンに影響を受けて、シンクロニシティ(共時性)とかサイバー・パンクな世界観を表現したいと思いました。」

《波打ち際に触れて》(1999)は、絵具のマチエールと写真を合成して、デジタル・コピートした作品。「このころになると、パソコンで画像を



埼玉県小川町のアトリエにて。カレー粉工場だった建物を仲間とアトリエ兼展示スペースにリノベーション中。背景の中央の作品《精霊》(2005)は、大作《世界のカタチ》(前ページ)を描き進む途中、自分が精霊になって作品のなかに入り込む夢を見たことから生まれた。左右はそれぞれ、《GATE(blue)》《GATE(yellow)》ともに2004年*]

かわむら・かつひこ 1957年長野県生まれ。82年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。84年同大学院美術研究科修了。主な個展に85,86,88,90,94,96,98,2005年コバヤシ画廊(東京) 89,93年ギャラリーなつが(東京) 90年インターフォームアトリエ+フオインターフォーム(大阪) 92年インフォムーズ(東京) など。主なグループ展は、90年「脱走する写真」(水戸芸術館、茨城)「観念の刻印」(栃木県立美術館) 92年「DIVER'S ROOM」(コバヤシ画廊、東京) 94年「HUMANISM AND TECHNOLOGY」(ソウル現代美術館、韓国) など

7月15日、埼玉県比企郡小川町の作家アトリエと自宅にて取材

たかみ・あきよし「美術評論家」

加工して出力するようにりましたが、写真を使ったそれまでの作品の展開に限界を感じました」。

90年代の後半から、しばらく発表をやめて、久しぶりの個展の新作は、1点描くのに半年かかる手描きの大作になった。

《世界のカタチ(OUTSIDE INSIDE) 2》(2005)は、インターネットからダウンロードしたジャンглの画像に雑誌の写真や、自分の庭を撮った写真などを合成して出力した

画像を拡大トレースし、アクリル絵具で描写した作品。「誰も足を踏み入れたことのない、壁のようなジャンглを描いてみたかった。それは、現実のジャンглとは別な、脳の中に広がる「ユーロネット」が生みだす風景であり、意識と無意識の力カです。鳥は、自我の象徴です」。

「カーテンと照明を付けたのは、普通の絵ではなく、ショー・ウィンドウや書き割りのような効果を出したかったので……。家庭を持つたり、年齢による変化もあって、自分は何を見たかったのかとあらためて考えて、時間をかけて仕事をするようになりました」。

作品に描かれた密林の葉の一枚1枚が、「時間の集積」と言う画家のパソコンの内には、アフリカ、アマゾン、ボルネオ、アラスカなど、世界中の森林地帯の様相がアーカイブされ、いまだ見ぬ世界の貌かたちになるときを待っている。